大量消費へ厳しい目

解説

ニホンウナギが国際自然保護連合（IUCN）のレッドリストで絶滅危惧種とされたことは、その生息状況が東アジア全体で悪化していることを示す。

ウナギが高値で売れる日本向けの国際取引拡大が減少の一因になっているとの指摘は根強く、ウナギを大量消費する日本に厳しい目が向けられるのは確実だ。

ニホンウナギ減少の背景にあるのは1990年代末から2000年代始めにかけて急拡大した日本のウナギ消費だ。町の専門店で食べる高級食材だったウナギが、加工済みのかば焼きパックやコンビニのウナギ弁当などの形で売られるようになり輸入も急増した。

資源の減少が指摘される中、漁獲規制の取り組みは遅れ、国内外で不透明な稚魚取引が横行していることが指摘されている。ウナギが絶滅危惧種だと国際的に認識された事実を深刻に受け止め、資源管理の徹底や消費の適正化、取引の透明化に真剣に取り組まなければ、ワシントン条約での取引規制導入が現実味を帯びてくるだろう。

26.6.13